

ヨウダ、ラシイ、-ソウダ、ダロウ

—現状への事態の現れ、事実めあて、という2つの軸での比較—

藤 城 浩 子

[キーワード] 現れ、事実めあて、印象、想像

1. はじめに

本稿ではヨウダ、ラシイ、-ソウダ¹、ダロウの違いについて、話者が発話内容と現状の関係をどう捉えているか、事実めあてであるか否か、という2つの要素を取り上げて検討していきたい。

ヨウダ、ラシイの使い分けに関しては、これまで非常に多くの研究がなされてきた。田野村(1991a)は、これらの研究の中には、いわゆる推量のヨウダとラシイを取り上げ、これをどちらもある根拠をもとにした推量と考えて、そのニュアンスの違いに言及するものが多い(柏岡 1980、柴田 1982、寺村 1984、早津 1988 など)ということを指摘したうえで、このような傾向に異議を唱えている。そして、ラシイは「根拠」に基づく「推定」を表し、ヨウダは「外見」「様子」「印象」を表すとして、両者は基本的に意味が異なることを指摘した。中畠(1990)もまた、ラシイは基本的に「事実を推論」するときに用いられるが、ヨウダの本質は、事実を推論することにはなく、「現実界を描写する」という点にあると指摘している。これらの議論はラシイとヨウダの性質をよりの確に捉えていると思われる。本稿も基本的にはこのような立場を継承するものである。しかし、そうなると、様相を表すとされる -ソウダと、ヨウダの違いはどこにあるかという疑問が生じてくる。

中畠(1991)では -ソウダは「未確認」、ヨウダは「確認済み」という使い分けが示されている。この説明は -ソウダとヨウダの使い分けによって、意味の違いがでる場合の二者の性質をよく表している。風間(1964)の指摘している「こっちのほうかうまそうだ」が食べてみる前の発話、「こっちのほうかうまいようだ」が食べてみてからの発話、という例はその典型的なものでらう。

しかし、どこまでが「未確認」で、どこからが「確認済み」なのかという問題は残る。たとえば、次の(1)の下線部の-ソウダはヨウダに置き換えることもできる。このように -ソウダ、ヨウダどちらでも表すことができる例があるのはなぜだろう。

か。また、このような例では、ソウダとヨウダの使い分けがどのような違いを生んでいるのだろうか。

- (1) もともと彼は小金井にある古い屋敷で妻と二人暮らししていたが、二ヶ月前妻が、都内の病院に入院して、闘病が**長びきそうだと**わかると、小金井の家を閉めて、会社にも病院にも近い鶯谷にマンションを購入したのだった。
(『アリバイの彼方に』夏樹静子/文春文庫)

一方、田野村(1991b)は -ソウダを「話し手の純粋な予想」とし、-ソウダに「外見、様子、情勢などといった要素は認めないほうがよいのではないかと」と述べている。しかし、-ソウダに外見、様子などの要素を認めないというのは考えにくい。また、仮に -ソウダを「話し手の純粋な予想」と考えた場合、ダロウとはどのように異なるのであろうか。

そこで、本稿では次の3点を念頭に置いて、ヨウダ、ラシイ、-ソウダ、ダロウの使い分けについて考察していきたい。①ソウダとヨウダを区別するものは何か、②ヨウダとラシイを類似表現たらしめるものは何か。③ソウダとダロウを区別するものは何か。

2. 考察

2-1. ヨウダとソウダ

まず、ヨウダとソウダを取り上げて考えていきたい。これまで、しばしばヨウダはラシイとともに取り上げられ、ある「根拠」をもとに事実を推量する形であるとされてきた。また、三宅(1994)はヨウダ、ラシイを「実証的判断」とよび、「証拠の存在を有標的に」表すとしている。この「根拠」「証拠」などの要素は、上記の「確認」「未確認」という使い分けとも関係してくると思われる。何らかの「根拠」や「証拠」がある場合には、「確認済み」という認識が生まれるからである。かりに、ヨウダは何らかの「根拠」または「証拠」を必要とする形式だと考えるとすると、どのようなものが「根拠」「証拠」と認められるのだろうか。

たとえば次の(2)~(6)の例の、「おいしそうなケーキを目にする」、「山田さんが理系に強い」、「カレー粉をたっぷり入れる」、「風が出てくる」、「朋子がそわそわしている」という状況のうち「根拠」「証拠」とみなされるのはどれだろうか。

- (2) (おいしそうなケーキを見て)おいしそうだな。*おいしいようだな。

- (3) (山田さんは理系に強い)この問題難しいなあ。そうだ、山田さんに聞こう。
山田さんなら解けそうだ/*解けるようだ。
- (4) (カレー粉をたっぷり入れて) これは相当辛そうだな/*辛いようだな。
- (5) (風を揚げようとしていたら、風が出てきた) うん、今日は良く揚がりそうだ /*揚がるようだ。
- (6) (友人の朋子が最近いつもそわそわしている) 最近の朋子は変だ。そわそわして、何か隠し事でもありそうだ/あるようだ。

この中でヨウダの使用を許しているのは (6)だけなので、「根拠」「証拠」となりうるのは「朋子がそわそわしている」という状況だけだということになる。

中島(1990)はヨウダの、推量や比況という用法における共通点を「現実界への現れを描く」という言葉で表している。「現れ」²という言葉については、それ以上詳しく述べられていないが、次のように解釈できるだろう。現状(「現実界」)が、ヨウダに前接する内容、つまり発話によって描かれている内容の現れであるように見えたとき(見えただけでよい)、ヨウダを用いてそれを表す。回りくどい言い方になったが、つまり、ただ現状の呈している様子を描写するのではなく、現状をある事態の現れとして捉えて描写するわけである。とすると、現状が、発話内容の現れとして捉えうるものでなくてはならないことになる。

例で見ると、(2)では、おいしく見えるということは、「おいしい」ことの表れではなく、外見がおいしそうな印象を与えているにすぎない。それは実際の味の善し悪しには直接つながらないのである。おいしそうな顔をして食べている人がいるとか、そのケーキがよく売れる、など「おいしい」という事態が何らかの形で現状に現れ出ている場合にのみヨウダを用いることができるといえよう。(3)では山田さんが理系に強いということは「山田さんは問題が解ける」ことの能性を高めており、解けそうな印象を与えはするが、その問題を解くことができるという個別の事態の現れではない。(4)(5)も同様である。これに対し、(6)の「そわそわしている」は、隠し事があることの現れとして捉えることができる。

そこで、本稿ではヨウダとソウダを次のように捉えていきたい。なお、ここで言う「現状」とは、対象物に関して話者が視覚、聴覚(人から聞いた情報も含む)、その他の感覚を通して得た情報をすべて含みうる。

ヨウダ：対象物や現状の呈している様子を、話者が捉えたままの形で表す。た

だし、現状をヨウダに前接する事態の「現れ」(に見えるもの)として捉えていなければならない。

・ソウダ：対象物や現状、想像の中で作り上げた状況から、話者が受けた印象を表す。

上の(6)では、ソウダを用いると、そわそわしているという様子が、隠し事があるという印象を与える、という表現になり、ヨウダを用いると、そわそわしているという様子を、隠し事があるという事態の現れと見ている、という表現になる。

また、次の(7)の例では、解釈によってはヨウダを用いることができる。

(7) だいぶ人が集まってきたし、そろそろ紙芝居が始まりそうだ / 始まるようだ。

(7)では紙芝居が定刻に始まるものであり、開始時間が迫ってきたために人が集まってきた、つまり、「そろそろはじまる」という予測される事態ゆえに人々が集まってきたと見れば、ヨウダを用いることができる。しかし、見物人が一定数以上集まれば紙芝居が始まるという場合には、「だいぶ人が集まってきた」という現状は、「始まる」ことの条件であって、その現れではない。そのため、人の集まり具合を見て「(この位集まれば)そろそろ始まりそうだ」と言うことはできても、「始まるようだ」とは言えない。

では、上記の試食後の「こちらのほうがうまさうだ」のようにソウダが使えない場合があるのはなぜだろうか。これは、ソウダが話者の受けた単なる印象を表現する形だからだろう。既に食べてしまってから、なお、印象のみを告げるというのは発話としてあまり意味がないため、場違いな表現になってしまうのである。その点では、ソウダは正に「未確認」の事態を表すのである。ただし、食べてからの発話でも、実際に食べたときの感想と食べる前の印象にズレがある場合には、単なる印象を述べることに意味がでてくる。それゆえ、ソウダの使用が可能になる。

(8) これ、おいしそうなのに味はイマイチだなあ。

ヨウダは、話者がとらえた様子をそのまま述べるときに用いられる形なので、それが印象に留まっておらず、事実そのものであっても、事実に見えるだけの非事実であっても表現可能である。前者が婉曲、後者が比況といわれる用法である。ただし、田野村(1991)で指摘されているように³、事実の決定権が話者自身にあっ

て、表面に現れた様子を述べるということ自体が無意味であるような場合には、ヨウダで婉曲表現をすることはできない。

以上述べてきたことから、はじめに挙げた①の点に関しては、-ソウダが単なる印象を表すのに対し、ヨウダは現状を何らかの事態の現れとして捉え、その様子をそのまま表現する形であると言えそうだ。

2-2. 比況のヨウダと、「ような気がする」などの表現について

ヨウダは、現状の呈している様子を、ある事態の現れとしてそのまま表現するものであり、事態が事実を指し示していないことが分かっている場合にも用いることができる。このように、表現される事態が非事実だと分かっている場合、比況と呼ばれる用法となる。ただし、比況の場合にも、較べられる事態の現状への現れを捉えるという、ヨウダの性質は保たれている。

(9) カレーに納豆を入れると結構おいしいんだよ。*(まるで)まずいようだけだね。

(10) そんな変な顔して食べられると、(まるで)うちのカレーがまずいようだね。

上記の(10)ではカレーのまずさが「変な顔」に現れると考えることができる。しかし、(9)のカレーに納豆という組み合わせは、いかにもまずそうではあるが、まずいという比況の対象の現れとは考えられず、ヨウダを用いることができない。

ただし、現状の呈している様相を、ヨウダに前接する事態の現れと捉えるのではなく、単なる「感じ」として述べる事が明らかになっている場合には、単なる印象を表す-ソウダと似たような働きをすることがある。

(11) カレーに納豆入ると結構おいしいんだよ。まずいような感じがするけどね。

(11)では「～ような感じ」と、話者の受けた感じだけを問題にすることが明示されており、何らかの事態の現れとしてではない、単なる印象を表すことができる。ほかに「感じる」「見える」「思える」「気がする」などの動詞や、「一見」などの副詞が付くと、単なる印象を表すという、-ソウダに一步近づいた用法を許すようである。

2-3. ラシイ

よく指摘されるように、ヨウダとラシイは置き替え可能な場合が非常に多いが、これは、ヨウダとラシイが、ある事態の現状への現れを捉えるという点で共通し

ているからだと考えられる。しかし、現状を、何らかの事態の現れと感じたら、感じた様子をそのまま述べるヨウダとは異なり、ラシイは常に事実めあて、つまり、事実であると考えられることがらを表そうとする形である。ある現状を何らかの事態の現れとして捉えたうで、常に、それが事実を指し示していると考えるところに、ラシイのヨウダとの違いがある。

ラシイ：現状が、ラシイに前接する事態を、事実として指し示していることを表す。ただし、現状をラシイに前接する事態の「現れ」として捉えていなければならない。

前述の中畠(1990)、田野村(1991)では、ラシイは事実を推定する形であるため、話者が知覚で捉えた様子をそのまま表現するような場合のヨウダは、ラシイに置き換えることができないと指摘されている。例としては「顔色がよくないようですな。」(松本清張「落差」/田野村 1991 の例文より)などが挙げられている。

ただ、寺村(1984)が指摘しているように、ラシイには事実を推定する時、「他から得た情報によりかかる比重が大きい」という特徴がある。話者自身が直接事実を捉えたのではなく、話者以外のもの(ここで言う「現状」)が指し示す事実として事態を表現するためだと思われるが、このような特徴がラシイに対する「客観的」、「ひきはなし」(早津 1988)などの指摘を生み出していると考えられる。この特徴のため、事実の判定に話者の主観が大きく関わっているような例では、事実めあての表現であっても、ラシイを用いることができない。(12)を見られたい。

(12) うん、おいしくできた。これまでの中では一番おいしいようだ/ だろう/
*らしい。

(12)は、ヨウダだけでなくダロウも付きうることから、推量表現としても成り立つものと思われる(先程の「顔色がよくないようですな。」は「顔色が良くないだろう/ でしょう。」と言い換えることはできない)。しかし、(12)のヨウダやダロウをラシイに置き換えることはできないのである。

また、話者以外のものが指し示す事実として事態を表すために、事実の認識が間接的なものであることが表されているが、それが必ず推量、または想像という話者の思考プロセスを含むわけではなく、一般に伝聞と呼ばれるような用法もある。この場合、情報源が確かなものであって、断定できるような情報であっても、

それが話者以外のものが指し示す事実である限り、ラシイを用いた表現が可能である。

(13) AがBに向かって：昨日マライアキャリーのコンサートに行ったんだ。

BがCに向かって：Aさんは昨日マライアキャリーのコンサートに行ったらしいね/ *だろうね。

さて、既に述べたように、ヨウダとラシイは、何らかの事態の現状への現れを捉えているという点で共通している。冒頭の②、ヨウダとラシイを類似表現たらしめている要因とは、この事態の現状への「現れ」だと言えるだろう。田野村(1991)は、あることがらを受けてその背景にあるものを表す「~のだろう」とラシイの類似性を指摘しているが、発話現場や文脈の中に存在する「あることがら」(ここで言う「現状」)と発話の表現内容(ここで言う「ある事態」)を、「背景」という形で結びつける力がヨウダにもラシイにもある。その意味では、ヨウダ、ラシイは、発話と言語的・非言語的コンテクストとの結束のあり方を言語的に示していると言えよう。

2-1でも少し触れたが、一般にヨウダ、ラシイに「根拠」という要素が要求されるのも、ヨウダやラシイが、現状と発話との結束性を、「あることがら」とその「背景」という形で示すためだと考えられる。「この店はおいしそうだ/おいしいだろう」は話者の単なる印象や予想を表すが、「この店はおいしいようだ/おいしいらしい」と言うには、おいしいという事態の現れとしての「あることがら」が前提として必要になってくるのである。

2-2. ソウダとダロウの共通点と相違点

はじめに少し触れたが、田野村(1991b)は、-ソウダは予想を表すとしている。また、-ソウダに外見、様子、情勢などといった要素は認めない方がよく、ソウダが一見そのような前提を持っているかのように見えるのは、予想という行為自体が、何の手がかりもなくなることが希であるためだとしている。しかし、これはむしろダロウに当てはまる特徴であると思われる。

田野村(1991b)は-ソウダに外見や印象を認めない理由として、「こんなことをしていると先生にしかれそう」などの「仮想のもとでの予想」ができることを挙げている。また、(14)のような例でも-ソウダをヨウダに置き換えることはできないことを指摘している。

- (14) 「歳をとると（音楽の演奏が）速くなるってことあるっていうけど、ほんとうかしら。」 「そういうことあるのかね。」 「そういうことあるみたい。」
「ほんという、歳をとるとおそくなりそうだけだね。」

（小沢征爾・広中平祐「やわらかな心をもつ」/ 田野村 1991 の例文より）

氏はこの例の -ソウダをヨウダに変えることができないのは、ヨウダが、人から聞いたことなどを総合して得た印象を表す形式であるのに、ここではその印象と矛盾する内容が表されているためだとしている。

以下、この例を念頭に置きながら、ダロウとの比較を通して、-ソウダを見ていきたい。なお、ここでは、三宅(1993)の定義に従い、ダロウを「話し手の想像の中で、命題を真であると認識する」形であると捉える。

まず、「仮想のもとでの予想」についてだが、これはダロウでも「こんなことをしたら、先生にしかられるだろう」などと言うことができる。また、(3)のように、対象物の持つ属性から察して、ある特定の問題が解けるという個別の現象までを推察しようとする場合の-ソウダも、ダロウに置き換え可能である。

- (15) この問題難しいなあ。そうだ、山田さんに聞こう。山田さんなら解けるだろう。

これは -ソウダやダロウには、ヨウダに見られるような、現状をある事態の現れとして捉えるといった性質がないからだろう。悪いことをしたり、山田さんが理系に強かったりすることが、「しかられる」、「解ける」という事態の現れである必要がないため、それが想像上のことでも表現できるのである。

では、本当にソウダは外見や情勢といった要素を前提としない形式なのであろうか。次の例をみられたい。

- (16) A「この間、ピザがまだおりないって言ってたけど、どうなった？」
B「まだだけど、何とかなりそう。」
B'「まだだけど、何とかなるだろう。」

(16)のソウダとダロウを比べると、「何とかなりそう」は多少なりとも目途が立っていて、何とかなるという印象を話者が持っている場合に用いられる。そこには、現在の状況や情勢という要因が働いているが、「何とかなるだろう」は状況はどうであれ、話者が楽観的に構えている場合には用いられうる。つまり、話者の頭の中だけでの想像である。

ダロウにしても -ソウダにしても話者が想像の中でイメージを膨らませて、現実

とはかけ離れたことがらを表すことができる。しかし、その場合にも -ソウダには必ず状況が意識されており(それが現実の状況であれ、想像の中での状況であれ)、そこから実際に話者が受ける印象を表す。それに対し、ダロウの場合、真であるという認識、判断自体が想像の中でなされるのであり、印象を表すという特徴はないので必ずしも状況を反映したものでなくてもよい。もちろん、いくら想像の中であるとはいえ人間の言語活動であるからには、想像のパターン自体が現実を反映したものではあるはずだ。

さて、状況を考慮に入れるという意識が薄く、自由な想像を許すとはいえ、ダロウには予想される事実と言及しようという意識が働いている。その点ではラシイと性質を共にしている。そのため、(17)のように、はじめから事実と想定するつもりもなく提示された状況にダロウを用いると、不自然である。

(17) (暗い道を歩いていて) 気味が悪いなあ。お化けが出そうだ。/ *お化けが出るだろう。

(17)のように本当にお化けが出ると考えているわけではないような例でも、印象だけを表現できるのは、ソウダが事実の想定や予想を目的とはしていないためではないだろうか。一方、ダロウにはそれができない。ダロウによって表現される想像の自由度は大きいが、それはあくまでも予想される事実に向かっているのだ。

この例のように、実際にはありそうもないことを、大げさに表現するようなものを田野村(1991)は「誇張」と呼んでいる。氏はこのような「無責任な空想や誇張などの表現が希な用法ではないことを考えると、「そうだ」自体の働きに真実の予想という側面を積極的に認めることには躊躇せざるを得ない」と述べているが、-ソウダを単なる印象を表す形と捉えれば、このような問題も生じないだろう。印象とは、事実がどうであれ、話者がどう感じたかを表すもので、事実めあてではないからである。(18)は氏の挙げている誇張の例の一つである。むしろこの-ソウダはダロウには置き換えられない。

(18) ここのポプラの黄葉は明るい黄色で、くるまがその色に染まってしまいそうだ。(西域(下)/ 田野村 1991 より)

先程も述べたように、ラシイやヨウダと違い、ダロウは事態の現状への現れを要求する形式ではないので、反実仮想など、現実離れした自由な想像を許す。そういう意味では、事実にはなり得ないようなことがらも表現できるのであるが、それはダロウの性質ではなく、非現実的な仮想という前提があって、はじめて成

り立つものである。(19) が勝手な想像を表していても許容されるのに対し、(20) は何かの比喩としてしか成り立たない。

(19) もし、僕が漫画の世界に住んでいたら、ドラえもんや親友になるだろう。

(20) *小学校に入ったら、ドラえもんや親友になるだろう。

また、断定の形でも「そんなにひっぱったら、腕が抜ける!」など、誇張と思われるような表現は可能である。誇張が大きいと、現実にはあり得ないことが分かっているため、かえって自由な表現が許されるのであろう。これにダロウをつけて、「そんなにひっぱったら、腕が抜けるだろう」などとすると、慎重な表現になった分、かえって信憑性が増して不自然な表現になる。

さらに、-ソウダは対象の外観を捉えて、そこから受けた印象を述べる形であるため、ケーキを見ただけで、「(このケーキは)おいしそうだ」などとその印象を率直に述べることができるのだが、ケーキを目にして即座に「(このケーキは)おいしいだろう」と言うのはどこか不自然である。ダロウの本分は見たときの印象を述べることであるのではなく、想像の中で事実を判断することにあるため、その判断が求められるようなコンテクストが必要になるのである。たとえば、店に並んだケーキのうち一つを指し、「これ、どうかなあ」「いやきっと、こっちの方がおいしいだろう」などというならば、自然な発話と言えよう。

ここで(14)の例に戻ると、この例で-ソウダが使えるのは、-ソウダが単なる印象を表す形で、事実めあてのものでないからだと言えそう。実際は、歳をとると演奏が早くなる、ということは解っているのだが、事実はどうであれ、歳をとることから受ける印象は「演奏がおそくなりそう」というものであると述べているのである。つまり、対談相手の話の内容を捉えて、そこから受けた印象を述べているのではなく、「歳をとる」という現象から受ける印象について述べているにすぎないのである。

はじめに挙げた③の点については次のようなことが言えそう。-ソウダは単なる印象を表し、必ずしも事実めあてでないのに対し、ダロウは、話者が想像の中で導き出した事実を表す。ただし、ダロウの場合、状況や、対象物から受ける印象などの要素を考慮に入れるという意識は必ずしも強くない。

3. まとめ

本稿ではヨウダ、ラシイ、-ソウダ、ダロウについて、事態の現れとしての現状

を要求するかどうか、事実めあてかどうか、という2点を軸に考えてきた。ヨウダとラシイに関しては基本的に中畠(1990)、田野村(1991)などの立場を継承して考察を進めたが、-ソウダ、ダロウを含めた4つの表現の比較を通して、各形式の共通点と相違点をより明確にできたのではないだろうか。その結果は、表1のように表すことができるだろう。

表1

	事実めあて	様相
事態の現状への現れ(有)	ラシイ	ヨウダ
(無)	ダロウ	ソウダ

ヨウダとラシイがともに現状への、(表現内容である)事態の現れを要求するのに対し、-ソウダとダロウにはそのような性質はない。また、ヨウダと-ソウダは、対象物や状況の様相を捉えて表現するという点で共通し、ラシイとダロウはどちらも事実めあてだという点で共通する。

注1) -ソウダはモダリティー形式としては特殊で、接続の形からしても意味からしても、森山(1989)の指摘するようにアスペクト的色合いが濃い。また、テンス性をはさみ込む余地もなく、名詞には接続不可能などの制限もある。しかし状態的な述語に付く場合には、やはり認識的ムードの意味合いを持ち、ヨウダと置き換え可能なものも多いため、考察の対象とした。ただし、伝聞のソウダは扱わない。

注2) この「現れ」とは中畠(1990)の指摘した「現実への現れ」という概念を具体的に示したものであり、ここでは、ヨウダが捉える「様相」の特徴を、-ソウダとの対比において、より明確に表そうとして出てきたものだが、「現れ」と「事態」との関係は、現象としては、大鹿(1995)が「結果」と「原因」、「部分」と「全体」、として扱っているものと似ている。ただ、ここでの「現れ」と「事態」を、「結果」と「原因」または「部分」と「全体」というような固定された関係で捉えるのは躊躇せざるを得ないし、また、本稿の立場は、ラシイ(及びヨウダ)を「本体把握」と捉える氏の立場とは大きく異なる。「現れ」の解釈の仕方は、本稿での立場を形成する基本的な部分に関わっているので、誤解を避けるためにも、ここでは「現れ」という用語をそのまま用いて説明している。

注 3) たとえば、田野村(1991)では「お金を貸してもらえませんか？」と頼まれたときに、それを婉曲に断りたいからといって「ちょっとだめなようです」と言うことはできないことが指摘されている。

参考文献

- 大鹿薫久 1995 「本体把握—『らしい』の説—」『日本語の研究』明治書院
- 風間力三 1964 「『死にそうだ』と『死ぬようだ』」『口語文法講座3』明治書院
- 柏岡珠子 1980 「ヨウダとラシイに関する一考察」『日本語教育』41 日本語教育学会
- 柴田武 1982 「ヨウダ・ラシイ・ダロウ」『ことばの意味3』（國広哲弥編）平凡社
- 田野村忠温 1991a 「『らしい』と『ようだ』の意味の相違について」『言語学研究』10
京都大学言語学研究室
- 1991b 「現代語における予想の『そうだ』の意味について—「ようだ」との
対比を含めて—『国語語彙史の研究 十二』和泉書院
- 1993 「『のだ』の機能」『日本語学』12-10
- 寺村秀夫 1984 『日本語のシンタクスと意味II』くろしお出版
- 中畠孝幸 1990 「不確かな判断—ラシイとヨウダー」『三重大学 日本語学文学』1
- 1991 「不確かな様相—ヨウダとソウダー」『三重大学 日本語学文学』2
- 仁田義雄 1991 「現代日本語文のモダリティの体系と構造」『日本語のモダリティ』（仁
田義雄・益岡隆志編）くろしお出版
- 早津恵美子 1988 「『らしい』と『ようだ』」『日本語学』7-4 明治書院
- 三宅知宏 1993 「認識的モダリティにおける確信的判断について」『語文』61 大阪大学
- 1994 「認識的モダリティにおける実証的判断について」『国語國文』63-11
京都大学
- 森田良行 1980 『基礎日本語』角川書店
- 森山卓郎 1989 「認識のムードとその周辺」『日本語のモダリティ』（仁田義雄・益岡隆
志編）くろしお出版

付記：本稿は平成7年度日本語教育実習課程において作成した小論文をもとにして、まとめたものである。

[マレーシア工科大学予備教育課程日本語教師、1993年3月卒業]